

小さな取り組みが大きな成果に… 六条区民陶醉

集う仲間で盛り上がり！今も昔も

六条ふれあい祭り



酒の席はもちろん、結婚披露宴での余興などで大ウケの「スコップ三味線」。

「七瀬スコップパーズ」が六条公民館の求めに応じ、参加。スコップ（すこっぷ）三味線とは、スコップを楽器に見立てて音楽とリズムに合わせて栓抜きでスコップを叩き、津軽三味線を真似て演奏するもの。昭和61年、五所川原市在住の館岡屏風山氏が、自身の経営する飲食店「ラブポーション」で岸千恵子の千恵つこよさで、スコップと栓抜きを使い三味線の真似をした

のが起源と言われています。津軽三味線の叩きつける音とスコップを叩く音がマッチして、本当に弾いている感覚を演奏者、聴衆ともに味わうことができ、楽器を弾けない人でもスコップ1本あれば誰でも手軽に始められます。聞いて楽しくやってみて楽しい、そんな芸術です。今では、子供が音楽に興味を持ち楽しむきっかけになったり、お年寄りのリハビリを兼ねた娯楽にもなっています。

れば簡単に演奏できる手軽さから、宴会芸として認知され津軽スコップ三味線公式世界大会には、毎年全世界各地から演奏者が参加し全国版のテレビニュースでも取り上げられたり都道府県大会も行われており世界的に広がりを見せています。

は、現知事（当時副知事）も自らスコップを手に取りました。さて今回、これらアトラクションを始め、各種行事の企画・運営などにエネルギーを使っている公民館のバックヤードを覗いてみました。



公民館の仕事は、業務量の多さ、適応力を要求される、コミュニケーションスキルが必要とされることなどから、辛いと言われるかもしれませんが、六条に限っては、職員一人ひとりのスキルが高く難なく熟し、区民に寄り添っていたので、安心して各種行事に参加させていただいております。感謝の一言に尽きると、元福井市教育次長（社会教育担当）元福井市教育委員会社会教育課長の花木鐵男氏は当時を振り返り語りました。

経過し、その間に少子高齢化、若年層利用者の減少、価値観の多様化、情報通信技術の飛躍的発展などの社会的変化が起こってきています。また予測不能なコロナ禍などにも見舞われ、今後の公民館活動においては、従来の対面形式だけでは十分でない社会になったことが感られるようになりました。

そうした中で、毎年、マンネリ化することのないように、あれやこれやと知恵を出し行事に飽きがないよう汗かかっています。今回はスコップ三味線や空手の演武など新しい企画に、訪れた六条区民は釘付けになっていました。